

## NEW GLASS 編集長体験記



京都大学化学研究所

横尾 俊信

(Serial. No. 29~38 編集長)

ニューグラスフォーラムの機関誌（季刊誌）が創刊以来 100 号を達成されたことに心よりお祝い申し上げる。25 年の長きに亘り、日本のガラス産学界に対してガラスに関する最新情報を発信し続けてきた功績を高く評価する次第である。

さて私が第四代の編集長に就任した 1993 年は、バブルが崩壊して日本の経済状況が悪化し、特にこの年は統計でみると GDP が前年割れするという極めて憂うべき年であった。東京出張の際、それまでは新幹線はいつも満席で座席指定をとるのが非常に大変であったのが、以後は簡単に予約ができ、車両もガラガラになっているのを目の当たりにしてバブルの崩壊を実感したものである。最初の編集会議に出席し、次号か次々号の編集記事に関する検討を行っている中で、当時のニューグラスフォーラムの責任者である森川専務理事から信じられない発言が飛び出したのである。ボランティアである我々編集人に対していかにも我々の責任であるとも言わんばかりに「発行コストを削減してもらわないと困る」と言い出したのである。私は一瞬耳を疑った。「はあ、何故我々がそんなことを言われる必要があるのか。我々は頼まれて企画・編集をやっているものであって、コストのことを考えて努力すべきは〇〇の仕事だろう！本末転倒とはこのことだ！」と心の中で思ったものである。これが天下に名高い天下り官僚の唯我独尊かと感心したのを今でも覚えている。さは然りとて、そのときに提案したのが、それまで毎号表紙の写真を変えていたのを、「年間を通して同じ写真にしたらどうか」ということであった。コスト削減以外の利点として、年間の雑誌が表紙を見ただけで区別できることがある。しかしながら、その号を特徴付けるトピックス的な写真を載せる機会を奪ってしまうという重大な問題を残してしまった。以後このときの決定が踏襲されて現在に至っているが、このような歴史的経緯(?)をご存じないままに続けられているならば、以下のことを提案したい。現在の諸事情を勘案してコスト的に可能ならば、以前のように毎号写真をその号代表する内容の写真を掲載するというバブル崩壊以前のやり方に戻してはどうか。是非一度検討いただきたい。

ガラスは人類の歴史とともに発展してきた。文明の発展を支える材料として、あるいは

人間の生活を豊かにする材料として、ガラスの果たしてきた役割は筆舌に尽くしがたいほど大きかったし、今後も然りである。その立ち位置は時代によって異なると思うが、いつの時代も最先端文明はガラス無しでは成り立たない（We cannot live without glass!）という確信を持っている。我々学の側の役割の1つはこれまでにない機能を有する新しいコンセプトを持ったガラスを世に送り出すことだと思っているので、それに向かって頑張りたい。